

宮崎県立芸術劇場(メディキット県民文化センター) 平成28年度 舞台技術研修会

「劇場の安全管理セミナー ～安心、安全なホールづくりを目指して～」

【事業実施報告書】

実施日：平成28年9月14日(水) 午後1時～5時

(公財)宮崎県立芸術劇場
施設利用課 舞台技術係

■事業概要■

名称:平成28年度 舞台技術研修会

「劇場の安全管理セミナー ～安心、安全なホールづくりを目指して～」

日時:平成28年9月14日(水) 開場12:15/開会13:00/閉会17:00

会場:宮崎県立芸術劇場(メディキット県民文化センター)内 演劇ホール

参加対象:九州圏公共ホール施設 ～ 30施設/団体

参加人数:九州圏公共ホール施設 ～ 61名

:内、公技連加盟館 ～ 17名 計 78名

主催:公益財団法人 宮崎県立芸術劇場

協力:公共劇場舞台技術者連絡会

今回の舞台技術研修会では「安心・安全なホール」づくりの一環として、職員、スタッフの安全意識や判断力の向上を目的に開催した。

劇場施設の危険な場所・状況等を想定した安全対策のあり方や、危機事象での危険回避のあり方など、組織としての対処法を考える研修です。

また、各所で行われている避難訓練コンサート等の検証を通じた避難誘導とそのための訓練のあり方についての検討を試みた。

【会場写真:演劇ホール】



■内容～報告■

プログラム① 講義「安全を考える」 13:10～13:45 (35分)

講師:伊藤 久幸 (札幌市芸術文化財団 市民交流プラザ開設準備室)

～劇場に潜む危険と対処法の在り方(劇場における危険予防の考え方とその実態)～

テキストに「舞台技術の共通基礎」を用いて劇場に潜むわかりにくい危険な状況と場所を認識し、どのように対処すべきなのかを既存の在り方を例に学びながら、危機意識と管理対応力を高めるのが主題であった。

テキストを交えた劇場での安全管理体制の整備、各ホールでの危険箇所の認識、実演を交えた脚立を使用しての危険作業の例などのわかり易い解説であった。

また、伊藤氏が昨年まで勤務していた新国立劇場での例など現実的な安全対策などの都市部の大劇場ならではの進んだ対策が研修会参加者にとって非常に参考になる講義であった。

【プログラム①、② 講演会場写真】



伊藤氏



堀内氏(左)

プログラム② 講義「安全の対象を捉える」 13:50～14:40 (50分)

講師:堀内 真人 (KAAT神奈川芸術劇場)

～ホール利用者と来場者の安全を考える(劇場はどうやって安全を担保していくのか)～

劇場の管理運営・サービスにおいて安全対策は重要だが一定には保てない。施設利用の規模や演出状況によってその対策は危険とのバランスをとる事になる。そのバランスの取り方とセーフティーラインの決め方、考え方などを事例を交えて学び、事前に安全を総合的に担保するための判断力を強化(的確化)するのが主題であった。

堀内氏が勤務するKAAT神奈川芸術劇場は2011年に開館したこの国でも新しく、最新の設備が整った施設である。また、NHK神奈川放送局も同ビル内にある複合施設でもある。

最新設備の整った劇場ならではの、地方の劇場ではなかなかない大規模な舞台設営を実施しているのが同劇場である。

その経験からいかに安全の担保をとるか劇場としての対応など非常に参加者に参考になった有意義な講演であった。

プログラム③ ディスカッション「安全な劇場を目指して組織力を高める」 14:50～16:50 (120分)

パネラー:伊藤 久幸 (札幌市芸術文化財団 市民交流プラザ開設準備室)

堀内 真人 (KAAT神奈川芸術劇場)

金子 彰宏 (兵庫県立芸術文化センター)

中村 晋 (いわき芸術文化交流館アリオス)

佐藤 仁宣 (いわき芸術文化交流館アリオス)

進行:畠中 聡 (宮崎県立芸術劇場)

～組織の安全管理意識向上のための具体的方法(危険回避における臨機応変を身につける)～

劇場の安全管理体制は組織で共通認識を既に得ていると思われるが、勤務状況や管理環境の変化などに対してどのように対応するのかを、マニュアル化するのは難しいだろう。

臨機応変な対応を組織力にするために、必要な共通認識と、その構築の仕方を考える。

～避難訓練コンサート事例の検証(利用者・来場者の安全意識の共有と協力を考える)～

ここ数年各地で開催され始めた避難訓練コンサートの事例を参考に、その目的と考え方、実施方法や課題等を検証し、そこからより良い避難訓練の在り方を検討することで安心・安全な劇場運営の組織力を高める。

【プログラム③ パネルディスカッション会場写真】



左端:畠中(司会) 座席左より～伊藤氏、堀内氏、金子氏、中村氏、佐藤氏



中村氏(左)、佐藤氏(右)



金子氏(センター)

畠中: プログラム①の伊藤さん、プログラム②の堀内さん講演ありがとうございました。プログラム③のパネルディスカッションも引き続きよろしくお願いします。プログラム③からは新たにパネラー3名が加わります。3名の方、簡単な自己紹介をお願いします。では兵庫の金子さんからお願いいたします。

金子: 兵庫県立芸術文化センターから参りました金子彰宏と申します。簡単な自己紹介をさせて頂きます。私は西宮で生まれているのですが仕事は東京の方で18年、主に演劇の音響部門で仕事をしてきましたが、兵庫芸文が建設されるということで図面設計段階から参加しました。今オープンしてちょうど11年になりました。阪神淡路大震災の時は東京に居ました。兵庫に来てから東日本大震災があり、震災自体は本当に運良く免れてきました。今日は、震災を体験し、苦い思いや体験をした福島の方もいらっしゃるの、逆に私のほうが学ばせてもらうことがきっと多いと思います。よろしくお願いします。

中村: 福島県のいわき市から参りました、舞台を担当している中村と申します。今日は一日よろしくをお願いします。

佐藤: 同じく福島県いわき市のいわき芸術文化交流館アリオスの佐藤と申します。本日は、技術畑の方が多いと思いますが、私は広報セクションを担当させていただいております。今日のパネリストの中では分野が違いますが、今日はなぜいわきだけ2人いるのかと申しますと、いわきアリオスが行っております自主防災組織の防災プロジェクトという、課と部署を横断してのプロジェクトチームがあります。当初の立ち上げから少し時間が経ち、昨年よりプロジェクトリーダーだった中村から引き継いでプロジェクトリーダーとなったため2人で参りました。今日はよろしくお願い致します。

畠中: よろしくをお願いします。あの、本当に大先輩方々なのですが、僕のほうも本当に今日は知る、学ぶということで、いろんな見方だったりその場での状況だったりのお話を考えるかと思っておりますので色々よろしくお願いします。

このディスカッションですが基本的に、どういう雰囲気ですらという事をやりたいのかを少しお話ししたいと思います。別に危機管理の組織、組織力を強化していく方法論を皆様にお伝えしていくわけではありません。今日、ここにいるパネラーの方と会場の皆さんと一緒に考えてこういところまでは対応力を考えて、なるべく将来に向けて正解とか不正解ではなく、それでも考えていこうと、この短時間で皆さんと一緒に考えようこのディスカッションで今、いざという時に動けるのか、組織で対峙できるのかを捉えて一つ一つ具体的な言葉も考えていきたいと思っています。ところどころ外れたりするかもしれませんが幅広く組織だったり、避難訓練コンサートだったり交えて話をしていければと思っております。

では皆様にお配りした資料の中の豊橋PLATの避難訓練コンサートの流れを検証していきたいと思っております。その後で伊藤さんからの提供で新国立劇場で行われた避難訓練コンサートの映像を観ていこうと思っております。

なぜ、いろんな避難訓練コンサートがある中で豊橋を取り上げたかという、だいたいはこの流れです。まず司会者が出てきて説明をし、演奏が始まります。そして演奏中に地震が発生します。その中で地震発生時の演出があり、主催者が出てきて「客席で待機して下さい。」等のアナウンスがあり、アナウンスがあった後に皆さん避難しましょうとなり、避難をして避難所で集合して報告等諸々があり避難訓練コンサートの終了となり、また、ホールに戻って続きの演奏を聴いて終演で挨拶という流れで終わるという流れがここ最近の主流となっています。僕が知っている中で、ここ1～2年で多いところで3回ほど開催していますが、まだ、どこも模索しているのではないかと思います。

畠中: この流れがほぼ同じというのは、なぜだろうという疑問も少しあったりしています。豊橋のPLATなどに参加していろいろ思いました。本当にこれで良いのだろうか？など、また後ほどお話ししたいと思います。一旦このような流れでしたと説明しましたが、次に新国立劇場での避難訓練コンサート、これは規模が全然違いました。私は実際参加はしていませんが、映像を見たことがあり、この映像を見てみるとさすがだな、凄いなと思いつつ、やはり大変なんだなと何となく想像しました。まだまだ課題もあるなとも思いました。そのあたりのことは映像の後に伊藤さんからお話していただき、その後どうだったのか、どう検証したのか課題があったのかを少しだけお話していただきディスカッションへと移っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

伊藤: 改めましてよろしくお願い致します。新国立劇場にオペラパレスという劇場がございまして、2014年8月31日にそこでキャパ1800名に対して1200名程度集まっていたいて、避難体験コンサートというのを行いました。資料に当日のシナリオを簡単に記していますが、今、畠中さんが言われた通り、コンサートの最中に震度5程度の地震が発生しました。揺れが1分間くらい続きました。その後、舞台上のある所から火災が発生し、初期消火はしたものの、鎮火不能ということでスプリンクラーを開放。その時、お客様はそのままその場で待機してもらっています。そこから避難行動となります。そこでカメラを入れて同じ時系列で編集したものがこの映像です。若干映像が暗く、音声も悪いかもかもしれませんが、表方と裏方と防災センターとを四コマに切ったものもございまして。それを観ていただいて、また畠中さんにマイクを渡したいと思っています。ではよろしくお願いします。

～～～～ 新国立劇場「避難体験コンサート」:映像投影(約13分) ～～～～

伊藤: この避難訓練で我々が知りたかったこと、やりたかったことは本当にその避難場所に1800人集まれるのだろうか？見た感じではそんな1800人も集まれるような場所ではないのでは？という疑問。普通のマニュアルだと大体偉い方の判断で避難するかを決定するとなっているが、大体その偉い方は現場には居ない。現場でどれだけやるのかを再確認したいのがひとつでした。そして訓練をして分かったことがひとつ、訓練なので判断が早いということ。本来なら消化活動などはもっと長いはず。あとは防災センターが全然間に合っていないこと。防災センターの責任ではないが、誰かから連絡がいき、そこからスプリンクラーの開放となると全然間に合わないということ。トラメガが意外と聴きとりにくい。同じ放送を2回、3回やっても理解が得られないというのが分かったこと。ではマイクを戻します。

畠中: ありがとうございます。皆さんも観ていただいて、僕もカメラワークもあり、迫力があるなと思ったのが第一印象ですけど、ここで避難訓練コンサートを検証するというのは後半にあるんですけど、なんでやるのかというと、南海トラフ地震を想定して、何時かは起こると思っていた方がよいと思っています。ちょっと先か、随分先かは分からないけど必ず来ると思ったほうがよいと思っています。実際、今日は熊本の方からも参加がありますので、もう経験されてはいると思うんですけど。今日も半分位は宮崎の方なんですけど、来る、対応しなければいけないんだという状況を想定しているとそこはどうかたちで想定するかということは、避難訓練コンサートが近いかなと。避難訓練コンサートをどうのこうのと言いたい訳ではないのですが、実際に想定するとこのような事例がですね、周りがどういう判断でやっているのというのが現実数年先の実情が役立てられるか、役立てられないのかがもう問われているのかと思います。ではここで、避難コンサートをやりはじめて2～3年と思いますが、避難訓練コンサートというか実際の対応を交えた組織的な安全の担保、担保というか対応をどうしていくのかをディスカッションしながら考えていきたい。

畠中：また、判断が必要な具体的な事例を交えてわかり易く振り返ってみたいのが、今日のこのディスカッションでの思いです。パネラーの方々からは、避難訓練コンサートの経験などを重視しながらいろんなお言葉をいただければと思っています。よろしくお祈りします。皆さんと一緒にディスカッションしていく中で、○なのか×なのかを挙げて頂くのですが、職場とか関係なく、個人の判断で挙げていただいて全然問題はないので、そのつもりで若い人からも自分の判断で挙げていただきたいと思っています。

いくつか質問は用意していますが、話の流れでいききたいと思っています。

まず題材としてですが今日、組織で何を考えているかということなのですが、皆さんにお配りしている資料の中の兵庫のマニュアルを見て下さい。組織でこのように対応していこうと考えて作られている前提と思っています。当館にもこのようなマニュアルはあります。いつ誰々が何をするというマニュアルです。私もそんなに経験は長くないのですが、いわきアリオスさんでもこのようなものがあつたようですが、実際はあつたが役に立たなかつたということです。それからは、やり方を変えていることですね。実際当館も、違ったやりかたで訓練をやっているのですが、今現在もこのようなマニュアルでやっていくしかないと思っています。そういう意味ではこのようなマニュアルは大事だなと思っています。この組織の安全対策の意識の具体的な向上というところですが、このマニュアルの安全管理体制、いわゆるマニュアルですね。これはみんな分かっている、自分の役割があらかじめ振られていて、こういうことが起きたら自分はこう動くんだというものがきつと自分の職場にあると思います。その動きをすれば良いのでしょうか？僕の疑問でもあります。

たとえばその日の勤務状況、たとえば当館は昨日の夜は計7名で過ごしました。練習室の利用くらいしかなかつたのでできるのですが、でっかいのが来たら少し思いますね。

勤務状況ですが、皆様のホールは勤務状況が1人だったり2人だったりすると思います。そのような状況でこのマニュアルです。実際、先ほど堀内さんからお話があつたと思いますが、安全の担保は変わっていくということで、実際マニュアルに当てはまらないことがあるのでは？いざという時に、僕はいつもここを避難訓練で担当している、避難誘導を担当している。避難誘導だけ担当していればよいのか？実は違っていて、実は昨夜の当館のように7人しか居ないって時に誰が指示を出すのか？と思いますが、当館では年上の方がするようになっているのです。昨夜の年上は誰かとは別にしてですね、僕にくる場合もあるんです。僕が避難誘導に真っ先に行くことができないんです。いろんな指示系統をさつと計算して状況をイメージしてですね、そこで決断しなければいけない立場に急に追いやられます。

しかも上の立場の人が居ればまた役割が変わってきます。このように僕の役割は変わるということですね。個人的に避難誘導さえすれば良いのだろうとと思っていたのですが、状況的には僕自身が組織的な判断を迫られるってことが急にできますか？話でもあるのですが、これを意識的に若い人もずっと仕事を続けていき年も取るのですが、そういう経験の中で変わってくるのは必然的にあると思います。このことは若い人も考えていってくれば頼もしいなと思っています。組織的にもみんなで作っていくことも大事なんじゃないかと思っています。

では早速ディスカッションへいきますが、このような前振りがあつた上で突っ込んでいきたいと思っています。

まず、先ほども言いましたがこのマニュアルなんですけど、このようなマニュアルが自館にあって、僕はまさに今避難誘導の係さえしていれば良いと思っている方はいますか？

〈 客席の参加者への質問～○×のプレートの挙手のお祈り中 〉



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

畠中: 大体客席を見る限り半々より若干×が多いくらいですね。

臨機応変に動かなければいけない立場の方が半分より少し多い様子ですね。

もちろんパネラーの方は指示する立場で臨機応変な対応を考えなければいけない立場と思いますが、伊藤さんからどうぞ。

伊藤: はい。難しい内容なので○か×かは一概にはと思うのですが、役割を振られたことをまずこなすことが最先決であって、それをこなす役の人がいるのであればその範ちゆうを越えなくて×を挙げれば良いと思っています。

畠中: では次は堀内さんにお聞きします。

堀内: わたくし共の館は制作、運営で制作スタッフの事務所と技術スタッフの事務所と別の部屋なんですね。より現場に近いのは技術スタッフの事務所なんですよ。私はその技術スタッフの部屋にいます。実際に現場でレセプションさん、表方スタッフと、裏の技術スタッフが具体的に対処する現場に一番近い所にいるのが私で、その意味では臨機応変に立ち回らなければいけない責任者の立場なのですが、最終的な高度な意思決定は当館であれば副館長であったり館長であったり2階にいる方々で、私は5階に居るのでその様なギャップがありつつ、その立場であることとなります。

金子: まず、畠中さんがこのマニュアルとおっしゃっているのはマニュアルではないのです。これは当館で年3回行われている総合訓練と消防訓練をトータル3回行っているのですが、その都度こういうものを作って毎回内容は違っています。で、今回はこういう訓練の方向でやっていこうとみんなに周知するために作っているものなので、このとおりにやればいいのかではなく、これでやってみたらどこが問題があるのかのたたき台のために、資料のある一回分の去年の資料を持ってきました。

先ほどの質問に戻るのですが、当館も新国立劇場さんと同じように大/中/小ホールとあり、そして自主事業もあり貸し館もあり、おかげさまで稼働率がかなり高いのですが、私はこの貸し館業務が、今日はどれだけ入っているかを全然把握できていない状態です。その状態でこのようなことが起こったら自分は何ができるか、もちろん消防の火元管理をしなければいけない立場の時のルール、あるいは自衛消防団のときの自分のポジションのときそれぞれ違ってきてます。そうした時に震災が起きたときに事務所にいるのか、舞台袖にいて公演担当しているのかで、たぶん全然変わってくると思うんですよ、そういう意味では先ほどの畠中さんの質問だと×に近いのかなとすごく思います。開館して10年も経ったにも関わらず、このようなことがあったときにどうするかみんながまだまだ模索している状態あり、実際みんながどれだけのことをやらなければいけなかったのかまだ見えていない状態です。実際問題、先ほどの映像を観て凄いなと思ったのですが、たとえば、お客様の誘導は誰がするのかはこのマニュアルを見てもらうと分かるのですが、お客様の避難誘導に関しては案内係に任せきりになったり実際にはそうはいかないと思います。そういう意味ではまだまだ、だらしない状態ではあります。今の状態では限りなく×に近いのかなと思います。

畠中: はい。では中村さんどうぞ。

中村: いわきアリオスは基本的には昨日の宮崎のような状態があります。深夜ホール関係が終わって貸し館も練習室と会議室だけ入っている状態。そうすると事務所に残っている技術系のスタッフはもう帰っていて、貸し館関係や広報関係、楽屋関係、チケットセンター関係のスタッフだけで、残っているのは4人～5人だけ残っている状態。そういう時に誰が判断する人になるかは一番キャリアが長い人間になる感じで、一番ホールを知っている人になる感じです。新人もいれば中堅もいる中で必ず判断する人間は事務所に残し、新人とペアでホールを

中村: 廻る。そういう状況の中でその場でトータルで見れる人間がその場で判断をして情報共有ができ、命令できる様な訓練をしています。

佐藤: 少し補足します。うちなんかは深夜22:30閉館ですから22:00、21:30で事務所に居る遅番と言われる人間が必ず各セクション1人はいます。一番少ない人数の時で4人というパターンがあります。まだ余震等あるときです。練習室が16部屋あるのですが、それを4人で廻ります。たったそれだけでと思われませんが、全体で職員は46名いるのですがその中で私はサブチーフという立場で、実際にあったのですが私が在籍年数も長かった、経験年数も長かったと、その時点で私はその時の指揮を取らなければいけないことになり、時間がかかるとはいえそれは安全確認をしなくてはいけないので、本部機能を残しつつ最小人数で動きます。その練習を防災訓練でも行っています。これは班編制を4人とか5人位の小さい班を作って同じプログラムを全班にやらせるのです。この班編制というのは訓練が始まる5分前位に編制を発表します。その班編制を見ると各自が顔を見合わせて、おのおの思うことがあるんですよ。そのプログラムは地震がおきるのか火事がおきるのか火山の噴火などその時々であって、館全体での訓練は広すぎてなかなか時間内で終わらないので範囲を狭めてそのようなブラインド訓練をやっていますが、それでも訓練をやっている側が言うのはおかしいのですが、今現状は実際の対応のほうが多い。実際揺れて対応するほうが多い。訓練以上のことを日頃からやらしてもらっていると思っています。長くなりましたが以上です。

畠中: はい。それは訓練が基になっている。当然、発想というか想像力は訓練が役に立っていたということですね？

佐藤: はい。やっぱり震災からもう6年ですが、法令で義務付けられている年2回の訓練なのですが、12回やってきている中で意識がそれぞれのスタッフにつき始めている、新人スタッフも初めて防災訓練に参加する時に先輩の顔を見る人が多いです。今日は何の訓練をするのだろうと。実際胃が痛いという人もいます。それは何も知らされていないのでただやりますとしか言っていないからです。それはそれで先輩達も自分の部下がヘマをするのが嫌なのでしっかり勉強しろよとその繰り返しでプレッシャー、プレッシャーの繰り返しで、プレッシャーででき上がっている、いわきアリオスです。

畠中: 当館も年2回の防災訓練をやっていますが、その2回で臨機応変に動けるようにまとまっていくものなのでしょうか？中身だったり組織的なものだったり、どうですか率直に。

佐藤: このあたりは案ずるより産むが易しで、やってみると意外な側面を見ることができます。新人スタッフとか、この人は普段はリーダーシップをとるところには居ないのですが、強制的にこちら側からプログラミングしてリーダーシップをとる様な班編制にするわけですね、少し意地悪ですけど。それでこの人がリーダーシップをどのようにとるのかとかを本人が自覚して、一回このリーダー役をやると、次は次でまたやらされるのではないかとビクビクして、それはそれで本人の向上につながっていく効果はあります。

畠中: ありがとうございます。みなさんのところでの防災訓練で、たとえばマニュアルに沿ってやっていると、今のいわきさんみたいにブラインド方式で内部にはあまり段取りを教えないでやっているとありますが。

マニュアルの沿ってやっているとどうでしょうか？(質問中○がマニュアルに沿って)

〈 客席の参加者への質問～○×のプレートの挙手のお願い中 〉

畠中: 客席はほとんどが○ですね。9割くらいが○ですね。×もありますね。要はブラインド方式で自分たちで考えて動こうよというところですね。パネラーの方を見ていませんでした、すみませんが、いわき以外の3名は○ですね。



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

畠中: 3名の方、○でいいんだということで良いのでしょうか？伊藤さんどうでしょうか？

伊藤: 僕が思う防災訓練というのは、小さいところで自分がどういう役割をしないといけないかと思っているのですが、実際は大きい流れをどこにもっていきたいかみんなでも共有するものだと思います。それは具体的に言うと防災訓練の一番の目的は自分たち裏方、お客様たち表の人が安全に避難できることがメインなんだということが分かれば良い話であって、ストーリー通りにやって次また違う役割がきたら違う役目をやれば良いと、その大きい流れが分かればマニュアル通りにやれば良いという内容ですね。

畠中: はい。わかり易い説明でした。では、堀内さんお願いします。

堀内: 私はその防災訓練をマニュアル通りにやることを不毛に思っているのですが、今日ちょっとアリオスさんのやり方を伺って、非常に意識が高くやっていたらいいのだと改めて意識していきたいと思っています。ただ、館が開館してからどういう時期にあるのかによって違うと思うのです。最初はシナリオをきちんと作って伊藤さんの言った通りに防災センターだったり現場だったり表方だったり、どう連携するとか流れを作らないと多分アリオスさんの様にいきなりやってもできないと思う。そういう意味では両方必要だと思うのですが、アリオスさんに一つ、訓練は一日のどれくらいの時間をかけてやってらっしゃるのですか？

中村: 最初は午前中でやっていたのですが、9時～12時では間に合わないので13時～17時もしくは17時を越えてやっている、午後もまるまるやっているということですね。

堀内: 全館ですよ？

中村: はい、飲食店も入っていますので参加できる時はそのスタッフも入ってやっています。まず、プロジェクトメンバーは各セクションから一人ずつ出ていて大体8人くらいいるのですが、そこはその人達が全て考えて、本当に唯一全員参加の催事と言ってはなんですけれどもそのようなものを行っている感じで年2回ですね。

堀内: 私どもの館は恥ずかしいことに1時間くらいのシナリオに則って、しかも利用ががっちり入っているところではできないのでそうではないところで防災訓練を入れるのですが、おのずとシフトが薄くなって人が居ない時に防災訓練をやるという、まったくもって本末転倒なことを反省します。

金子: おおむね堀内さんと同じ意見なのですけど、マニュアルっていうのは実際には通用しないと思っていますので、実はブラインドはやってみたいと思っていますし、やらないといけないと思っています。現実にはそうでないと感覚でいるのですが、ある程度大きな組織の中で、組織としてのみんなの認識を作っていくとか、ある程度のことはしないといけないと確認する上ではまだ当館はそこまで育っていない。現実的なことを言うとまだマニュアルなどでまだ欠けているところを探している段階である。それをまた組織の中で挙げていくということにもまだ自信がなくて、本来個人個人の判断力が結集して組織力になって行けば良いのですが、まだそのベクトルには向いていないと同じく反省しているところが同じです。

畠中: あの金子さんも思っていることだと思うのですが、状況の変化に対応するのは組織としては大変というか難しいのですが、伊藤さんがおっしゃっているように逃がせば良いのだという安全の状況がある程度仮定させていけば、そこに向かって多少は幅のある対応にはなると思うのですが、そこを目的にするのであれば、ある程度流れに乗るという迅速な対応に繋がるのじゃないかとは思いますが。

それで、今、みなさんのお話を聞いて思うけどそれもあるけどそうじゃない、今、僕がある程度の幅の中でと申しましたけど、ここでつまずいてどうアプローチする手前の判断を何を考えるのかも大事なんじゃないかなというのを感じますね。怖さというものを感じずにそういう思考回路では安心感は得られないなと僕は思いますね。

畠中: それではすみませんがこんな課題があつて、今時間が休憩の予定の時間ですがこんな状況ですので、一旦休憩をして休憩後に今話したような意識が避難訓練コンサートを検証していく為のちょっときっかけになってくれればと思っています。何らかのかたちで皆さんの中に自分の職場の在り方と相対的に思う事が少しあると思うのですが、そこをきっかけに探っていきたいと思っています。その後に、こういうところまで行ければいいなあというところまで行ければ良いと思っています。では休憩ということでよろしくお願ひします。ありがとうございます。

【休 憩】

畠中: それでは、始めたいと思います。プログラム③の後半ですね。避難訓練コンサートの検証。いまアリオスさんのことだったりとか、兵庫の金子さんのお話だったりとかありましたが、そういう具体的な避難訓練コンサートの事例を検証しながら、これをどう判断していけば良いのか、どうすれば安全を確保していけるのかということを考えていきたいと思っています。みなさんの資料の方にあります豊橋PLAT、先ほどさつとお話しました。続いて愛知の件を取り上げた上で、さつきとは違うなということもあるのでちょっと突っ込んで切り口になるのではと思います。

ちょっとここでパネラーの人に聞いてみたいことがあります。避難訓練コンサートを、ぶっちゃけ聞きます。やったほうが良いか？どうだってことを聞いてみたいと思います。

伊藤さんの方から急にすみませんがよろしくお願ひします。

伊藤: 僕は絶対やった方が良いでしょう。シナリオ通りだろうがシナリオを隠してだろうが絶対やった方が良いでしょう。やることによっていくつものことが解ります。誰が誘導してどこで詰まったのか。本当にあの避難場所でお客様も裏方も表方も本当に良いのか？そのように初歩的なことも含めたものも解るので絶対にやったほうが良いでしょうと思います。

畠中: 堀内さんお願ひします。

堀内: はい、同意見です。残念ながら当館では実現していませんが必ずやるべきで、得ることが多いと思います。

畠中: はい。金子さん。

金子: 僕もやりたいと思っています。実際その話がありまして進めようとしているのですが、なかなか様々な問題があり、できないんですけど、先ほども申しました通り3つのホールがあつて全部満席だったりすると3000人を越えるお客さんが、何処でどういう流れで何処で詰まったのかというのを見てみたいと。そこで実際想定しても3000人はありえないだろうと。それが震災の時には他のビルからも人が出てくるわけで、それはどうなるのであろうということもあるので、少なくとも当館だけはやっておかなければと思っています。

畠中: ありがとうございます。中村さんお願ひします。

中村: 一回やったのでもう十分です。小さなことをこつこつと、そこで一回やって問題点を解消できない限り、またやっても無駄。まずは小さなことをこつこつ。一つ目のことができたら二つ目をクリアしていく。それをクリアした上でもう一回やってみるのであれば賛成です。

畠中: はい。金子さん。佐藤さん。

佐藤: そうですね、手間がかかります。とにかく手間がかかりますので、それは何より皆さん各施設の実情と併せてみた時にやるべきだとは思いますが、避難訓練でよくある利用者役だとか避難者役だとかありますけど、そんなインナーメンバーを使ってやるよりも、本当に今日お集まり頂いたところの生身の人間を逃がすというのは、アリオスの避難訓練では一回だけですけど、

佐藤: その時だけだったのが本当に一回だけじゃなくて長年の蓄積の中である種の到達点なのかと
思っています。

すみません。ちょっと話が変わりますが、前半の方でアリオスはそんなアクロバティックなことばかりやっているとされたかもしれないのですが、ちょっと補足しますけどマニュアルはあります。マニュアルはあって震災後に旧マニュアルを震災での経験を生かして新マニュアルに変えました。改訂版マニュアルをベースにした訓練です。自衛消防隊というのは大きな組織でスタッフ全体での組織で、法令でそう組み立てざるをえないのです。それに基づいてマニュアルを作る。マニュアルはあるのだけど避難訓練に向けて少ない人数でやることが多いので、それをそのマニュアルの中でどこで特化するかと、それからマニュアルの中でも発生事例から省けることも当然ありえるのですから全部が全部マニュアルでカバーしているわけではなく、マニュアルは全部をほぼ網羅しているので一回一回の訓練で発生事象においては省くことができる箇所というのは当然出てくるのであって、そのリーダーはリーダー、考え方はマニュアルをベースにしているので誤解なきようにと発言しました。ありがとうございました。

畠中: ありがとうございました。ここで皆さんにも聞いてみたいと思います。今、実施されているいらないに関わらず、やりたい、今後もやりたい、今からやりたい、計画したいと思う方どうでしょうか？
(質問中〇が避難訓練コンサートをやってみたい、今後もやりたい方)

〈 客席の参加者への質問～〇×のプレートの挙手のお願ひ中 〉

畠中: ほぼ皆さん〇ですね。やっぱりやらないとまずい。まずいというよりはやっていかないといけないのだな、そうじゃないと安全になっていかないのだなということなんですね。
愛知の件なんですけど、これは、ちょっと変わっています。ほかのとは、ちょっと変わっていますので挙げてみました。なぜか交響楽団の公開リハーサルとのタイアップで行われました。これももっと珍しいと思います。もう一つこれもここが変わっているのが、ここは普通に公開リハーサルが始まりました。始まった後に火災が発生したんですね。何処か、客席からは気づかない所で舞台袖です。火災確認、火災が起きました。そして、確認に行きました。支配人が舞台袖に到着して実際にはこれは避難に値すると判断をしたところで避難誘導員への指示というのがあった後、その避難誘導員が配置完了したのを受けて、では避難しようとなりました。演奏中に指揮者に舞台担当が出て行って、もう一旦避難しようというような相談に行くのです。指揮者のほうの了解を受けた上でそこでマイクで客席にむかって避難いたしますと、避難して行くという流れになっています。当然そこから避難して避難所に行って避難所で到着してそこで解散ということになります。ここがちょっと変わっていて現場で解散なんです。要はそこでもう解散なんです。参加した人達がもう自宅に帰る僕はこれは実態に即していると思っ
ていて、実は、これ企画の段階でどうだったのか、今日は愛知の人は来ていないので解らないことではあるんですけど、僕は常々思っていて、実際避難、地震なり火災なり実際避難したらまた元に戻って演奏なんて聴けるのか？演奏聴くの？なんて思うんですけど、安全確認もすぐにはできないだろうし、それなのにまたどうぞまたご覧下さいという状況に、はたして劇場は判断するのかな？と思うのですが、ここはちょっとパネラーの方、ここはどう思われるのか？何かありますか？

伊藤: そうですね。やった経験から行くと、必ずどこかにお客さんは集めて何かをしたいと、現地解散はなかなか難しいと思うのですが、実際のことを考えると公演を観るというよりは自分の家のほうが気になって実際にここに留まらなくていいわけにはいかないと思いますね。その先どうするのかっていうのは、仕様が無いことだと思うのでうけどね。

畠中: そう思いますね。



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

金子: これってサービスですよ？単純に。ですよ？

あくまでも避難訓練コンサートに来て頂いてくれたお客様へのサービスだけだと、僕は認識しているのですが。当然その中で現実的にそうスムーズに再開するのはまれだと思うのです。クロークに荷物等を預けているとか、問題を今後どうしていくのか考えていかないと、特に冬だとクロークの荷物の問題など、問題がかなり山積みになると思う。コンサートに関しては、せっかくなら来て下さったお客様へのサービスと認識しています。

畠中: はい。堀内さん。

堀内: あの、それもあるのですがフィードバックをいつ取るかの問題。豊橋さんの場合はかなり細かくアンケートが書かれていて、観客側からのフィードバックはこういう時代なのでメール等で送って下さいというのがあるのですが、私も避難訓練コンサートの経験がないのでそういうものだと思っていました。

畠中: はい。あの、企画段階でそういう考え方があっても良いと思います。僕のなかでは避難訓練コンサートをやるといのは、その場に来た参加者も経験をするということだと思うんです。その経験が積み重なって実際に起こった時に生かされると思っています。実際に避難した後、ホールに戻ったとして演奏が聴けるんだなという経験が増えていくと、実際にそうなるっていいんじゃないのかなという不安もあるんですけど。

そこは事前に説明しないところもあるんですよ。実際に避難したら戻ってもうやることはないんですよという事前の説明もなく、ただやって終わるところもあります。

だからこういうのはちゃんと考えたほうがいいんじゃないかと思っています。あとですねここ名古屋では公開リハではあったんですけど、この出演者の方も避難していたんですけど、出演者の方が避難してこない場合のコンサートもあります。これもまた不思議だなと後半の演奏の為にその為に転換で準備しているんだろうなというのがあるんですけど、これも職員のための訓練としては実際にシミュレーションとしては職員のための訓練にはならないのではと思うんですけど。これは企画の時にちゃんと考えないといけないじゃないかと思うんです。実態に即したことをやる方が僕はいいんじゃないかと思うんですが、どうもコンサートの方に趣を置いているところがあって、ちょっとこれはパネラーの方に聞いてみたいと、パネラーの方に聞いてみて良いですか？避難訓練コンサートは実際に体験するための訓練に趣を置いた方が良いのか、ただ今ちょっと流行りだからと催しとしてですねやっても良いんじゃないかなという感があるんですけど、単純に皆さんに聞きます。訓練としてのほうに趣をおいた方が良いんじゃないかと思う方○か×かどうぞ。

〈 客席の参加者への質問～○×のプレートの挙手のお願い中 〉

畠中: ○が多いですね。×無いですね。

ということは、実際に対応するための訓練の一環であるというふうにやりたいと思っているということですね。そこで、ここでまたパネラーの方に聞いてみたいと思います。どうでしょうか、皆さんの意見は？どなたか話していただければと思います。

堀内: 勿論これは訓練のためのものと。

畠中: はい、僕が今なぜこんなこと聞いたかと言いますと、そうじゃないと思えるコンサートが大半なんです。さっきも言った通り一旦避難してまた戻ってくる。パネラーの方もおっしゃっていましたが課題があると。また戻って来てだとかあるんですけどね。上田の会館のものをインターネットで見たんですけど、避難訓練コンサートだったのです。

で、実際に避難しました。オーソドックスな形でした。避難したあとに、「ただ今、劇場の安全確認ができましたのでお戻り下さい。」と、アナウンスがあった後にみんな戻ってコンサートを聴くっていう形だったんですね。これ、そんなこと有るのかな？

畠中: と、だから今僕が言いたいのはやり方がみんなというか考え方がバラバラ、判断もバラバラだと思うのですね。これってバラバラで良いのかな？という疑問があります。だから今日こういうディスカッションの場で何らかのこの答えを提示していきたいと思っておりますけど。パネラーの方々、何かこうした方が良いとかありますか？こうした方が良いんだということ。

金子: 誰のための避難訓練コンサートかというところがどこか履き違えている、考え違いしている。お客さんが避難してみる経験の為ものだったらさっきので良いわけじゃないですか。でも本来のことで言うとお客さんと言うよりは、お客さんに裏導線を知ってもらう、劇場にしょっちゅう来てもらっている方々に知ってもらうという意味では有りだと思うのですが。実はそれ以上に避難をさせないといけない側、あるいは導線確保しないといけないスタッフ、何を確認しないといけないかの訓練だとするとちょっとおかしいと。言われてみると。僕もそこまでは考えていなかったのですけど。はい。

畠中: 伊藤さん。

伊藤: 僕は逆に方向は合っているんじゃないかなと。さっき金子さんもおっしゃっていたのですが、本来は避難するところまでで避難訓練コンサートは終わって良いはずですが。ただその後はやはり来て頂いたお客さんにそこで帰らせるわけにはいかない。一つはこれで終わり？避難してそれで終わりというのではそれはサービス精神的にはいかなものかと考えますね。一つ僕らがやりたかったことは今日集まって頂いた何百人だか何千人だかのお客さんに対して僕らはこういうことが知りたかったのだよと言うのはそれはそこまで、そこから以降は今日ありがとうございます。せっかく来て頂いたので用意したコンサートを最後まで観ていって下さい。それはそれで両立がありえるのかなと思います。そこは、僕は方向はいろいろ有るといふか、方向は合っていると僕は思います。

畠中: はい。ありがとうございます。先ほど皆さん避難訓練コンサートをやりたい、計画したいと全員〇だったのでここで確認して意見を、僕もちょっとこれどうなんだろうと思うところもあるんですけど、実際に地震が起きた時には、演出とか音とか明かりとかが入った時に客席で安全確認、避難導線等の安全確認ができるまで客席ですずっと待機しているというのはこれは正しいのでしょうか？パネラーの方に伺います。端的にちょっと何かあればお言葉を頂ければと。

堀内: ケースバイケースだと思うのですが、劇場の構造とか立地している場所だったりとかそういうことにもよるのですが、原則的にはそのパニックを防止するというのと、それが一番大きいのですが、地震の場合には勿論客席の構造や客席の上にある機材の設置状況により劇場施設側として確信をもって日頃から運営していくことになるのですが、客席に留まることが一番安全ですと低く身を屈めてもらう揺れている間は。そこに留まって下さいと。揺れが収まった後も状況が解り次第アナウンスをしますので留まって下さいというのが私は一番良い選択じゃないかというふうに思いますし、自分の館のことで言うならば明らかにそれがベストチョイスだと思います。そのように今考えています。

畠中: はい。いわきさんに是非聞いてみたいと思います。

中村: 避難誘導訓練と言った時点で訓練にならないと思います。まずそこが一つ。逃がさないで良いときって実際あるじゃないですか。逃がさなくても良いレベルとか。あ、揺れてるなとか、そういうふうな訓練だという前提で逃がすというのはありと思うのですが、そこにコンサートを付けたただと僕は思っています。

堀内: 今のは避難訓練コンサートの話じゃないですか？実際に避難させる時の話ですよ？

畠中: はい。そうですね。実際に避難するのにどんなタイミングが良いのだろうというところです。

堀内: 僕は火災の時は避難させなければいけないけど、地震の場合には必ずしも避難する

堀内: 必要ない。KAATでは防災訓練をやるときでも地震の時は客席に留まっているというシナリオで、火災の時は火災のシナリオでやっている。

中村: 地震の時でも逃がさない方が良いのじゃないかと、それは違う構想のところが出て来ると。それは各自治体の考えや建物の構造によって違って来るんじゃないかというふうに思います。

畠中: ありがとうございます。佐藤さん同感でしょうか？

佐藤: はい、そうですね。実際揺れますと、東日本大震災の話ですけど、あの時は1分間という長い時間揺れたのですが、言ってみれば乱暴な言い方ですが5分とか10分とか揺れるわけじゃないので揺れが収まらない地震って想像したくないですけど、揺れは収まるんですよ。それでお客さんはその場で椅子にしがみついているわけですから一息入れないといけないわけでパニック起こさない為に。そこでホール側の職員がアクションを起こしてしまうと火を着けてしまう位置になるかもしれないのでそこはその場でまず一息入れるためにもその場に留まるほうが総合的に安全じゃないかと言えます。アリオスの場合は幸か不幸か大きな震度で一度体験していますので強度についてのある程度の目算というのが最初からなされているのがかなり大きなところと言えます。

金子: 現実的に地震の場合ある程度の時間はたぶん必要だと思っているんです。揺れている時が一番誰も動けない。スタッフも当然動けないだろうし、その後開放するにしても少なくともお金を払って来ているお客さんがこの館から出て行く時にそのルートが安全かどうかの確認は絶対に必要だと思います。とすると、それを確認する時間、お客さんが入って来たルート、または別のルートを通らないといけないのか、あるいは隣のビルが倒れてそこは封鎖されているかもしれないのでそれを考えてみると最低でも確認をする時間って必要になるのでここに居る方が良いかどうかと言うのなら最終的にはそれ以外、手段がないんじゃないかなというような気がします。勿論、条件にもよりますが。

伊藤: 今の皆さんのお話と方向性は同じかなと思うので、まずシンプルに割り切って考えてもらったほうが良いのかと思っています。まず揺れの時、劇場の方が安全です。これは言い切る必要があると思います。なので、そのために非常点検やってますよと。揺れの時は安全です中に入って下さいと。それで火災の時、必要ならば逃げますよと両方とも共通していると思うのです。中に居て下さいも避難して下さいも僕ら劇場側から発信します。お客さんの方は中で留まって下さい。と言うのが僕らの共通理解じゃないかなと思っています。そうしないと日本全国何処の施設に行ってもルールが違っていると、ここのローカルルールはないよとか、ここのローカルルールはどういうふうにするのか、そうなるとお客さん非常に不安になるので、お客さんとしては何があっても客席に居るんだと、劇場の方から逃げろと指示があったら逃げろんだとそのようにしないと僕はお互いの安心感が得られないなと思います。

畠中: はい。僕もそう思いますね。それと避難という状況は発生するとして、それはその前の段階になってしまうのですが、演奏を中断する際の中断するかしないのかプロセスに関してちょっと知りたいと思っています。どういう考え方でプロセスを経て中止そして避難、避難というか留まるとしても、震度の揺れ方としてお話がありましたが一応プロセスの確認として知りたいというか皆さんのお考えを聞きたいと思っています。

では、いわきさん揺れた後のお話をお願いします。

中村: 一般の本当の発表会でとか、勿論一般のカンパニーが入って来てやったりとか、そこも含めて全部同じやり方というのは難しいですけど、基本的な流れとしてまず主催者側の縦軸と横軸の流れ。要は人の制作が居て舞台監督が居て、ドア係が居て、そのような書類を提出してもらっていただくというのがまず一つ。



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

中村: それと公演が始まる前の流れの打合せのときに、当日の進行の人と何かあったときに明確な責任者であることを確認する。何かあったら中止になるのか、中断になるのかということを確認させて下さいというようなお話をさせてもらっています。

畠中: その中でこういう状況なら劇場で判断するラインはありますか？

中村: バトンが絡まって動かなくなるとかで中止はあるのではないのでしょうか。それは仕込内容でも違いますし。

畠中: ほかの方どうでしょうか？

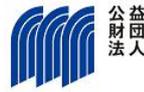
金子: 大きな地震であつたら多分、勝手に止まるんだらうと実は思っています。それで震度で言って良いのか分からないですけど、震度3とか4とかの時間が一番判断に困ると思うし、それはアーティストにもよるのかと、演劇関係者だったら確実に舞台を続けています多分。音楽関係のときは微妙なんですけど、例えば何かの拍子で止まったらそこは一回中断しますと、再開するかは検討しますとは言えるのですが、そのまま続けている場合にそれを止めに入るという判断はちょっと正直、難しいと思っています。こっちの経験で言うと例えばテレビや何かで取りあえず一度中断するというルールにはしていますけども、それ以下の時というのは、まだそこまでのルールはできていないです。

堀内: 先ほどもお話したと思うのですが。物理的に例えばステージ機材がぶつかるとか、何か立っている物が倒れるとか、そういう状況があればそれは有無を言わず、そういう危険性を認識した場合は劇場側の技術スタッフが主催であろうが貸し館であろうが止めます。そういう場合には止めますと契約書にも貸し付け要項にも入っています。そういう行為を発動させます。金子さんが言われたとおり震度3とか4とか微妙なラインに関しては誰が止めるのか事前に申し合わせをして止める人はこの人というようなことを特に貸し館の時には必ず定めているようにしています。もし中断にはエマージェンシーマイクが必ず下手袖にあつて当日、先ほどの新国立のビデオと一緒に舞台担当のチーフがそのマイクを使ってアナウンスをいれて協議の為に貸し館であれば主催者側の制作、舞台監督、劇場技術のその日の責任者、私が居れば私だし居なければ私に変わって技術的な公演続行かどうかという事に対して助言というか要素をそこに並べる人間が決めて下りまして、その者と事業の当日の劇場側の責任者と少なくとも4名が集まって上演が続行できるのか中断して何分かかるのか、あるいは中止するのか判断をする取り決めで、大雑把に言うところになっています。

畠中: はい、ありがとうございます。

伊藤: 僕も堀内さんと同じですけど、繰り返しになりますけど中断の権限というのは舞台監督が持っているのだと。しかし、その後の責任に関しては総責任者にあるべきだということで、舞台監督は臣従することなく中断する権限がありますよと、まず周知しておいた方が良くかなと。難しいのは今堀内さんが言っていましたけど再開するステップだと思うんですね。劇場側が言うことには特徴があるので、バトンがいっぱいあるので点検に20分かかりますと劇場側は。しかし、公演側としては20分かかったら帰れないお客さんが出てきちゃうよと、もうすぐにも公演をやらせてくれと言われた場合に劇場側からそれを強制的に止めるやらないという権利が今ありますか？というところなんですよね。それを結局、押し切られて、結果何もなかったから良かったのか、本当にそれで良かったのか？ということが僕らに問いかけられるところじゃないかなと思います。なので僕らとしては何かあったら再開のステップはこうなんだというところを示さないと再開する時間を貰えないんじゃないかと。劇場がいくらこれは危ないんじゃないか、ダメですよと言ったところで公演側がやらなきゃダメなんだよと言った時に本当に止められますかと。そこが一番難しいかと思っています。

中村: うちのホールでは小劇場とかは4階レベルにあるんですけど、震度4でもプラス1くらいの揺れ



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

中村: を感じる構造になっていて、ブリッジとかは固定式になっていて、吊り構造になっていない。躯体からそのままブリッジになっているので良い音がしながらカタカタと揺れるんですね、そうすると灯体とかがずれちゃったりすんですね、アタリをとって。それを直させてもらって、こちら側としては一度休憩を入れてもらって。そのかわりお客様の上にシーリングそれもブリッジと同じ形になっているので、何かあったら危ないので一度出てもらうかたちをとっています。ということをやちゃんと始まる前に一度、お話しさせてもらっているようなかたちでいます。そこも含めて一度中断で再開する場合には一度お客様は出てください、客席から一度離れてくださいということも含めて利用者とお話をしています。

畠中: はい、どうぞ。

金子: ちょっと伊藤さんに質問なんですけど、先ほど止める権限ということで舞台監督ということが出たんですけど、それは因みに劇場のスタッフを想定していますか？それともカンパニーサイドの舞台監督ということですか？

伊藤: 僕からするとどんな演目でも舞台監督的な人はいるんだろうと、コンサートにしてもお芝居にしてもオペラにしてもバレエにしても、それが自主であれ、乗り込みであれ、舞台監督っていうのは1名はいるんだろうと。その大きなピラミッドの頂点は彼ですよ、その彼のことでですね。

金子: 乗り込みできたらその舞台監督っていう意味合いですか？

伊藤: はい、そうです。

金子: でもそうすると劇場側の思惑と違う可能性が出てくることもあるということですよ？

堀内: ただ、それに加えて劇場側の技術スタッフも止める権利があると、私はそういう理解です。

伊藤: 多分、権利とまではいなくても助言まではする程度という表現です。

堀内: でも、そういう状況である場合には公演を中断するということがあるというようにさっきも言いましたが文章で渡っているんですよ？利用者に。なので、それはその様にできるんだと私の館では理解しています。一方で、主催者側が止めたのは何で止めたの？って話になる場合になるかもしれない。その微妙な際に主催者側の責任を負って誰が止めるのですかって話をしているし、加えて主催者側の舞台監督がそのことを別に主催者側の技術の責任者として制作者は止めていないけど私は止めますよとそこで止めることも当然あるだろうし、さらに劇場の技術者が劇場としてこれはもうダメですと、止める場合もあるという三段階あるということです。

金子: 難しいですね。多分そのカンパニーが来ていて主催者が来て、主催者が劇場だったらまた別ですけども完全に貸し館で例えばどこかのイベントが借りていてどこかのカンパニーが来てますと舞台監督が来てますとその場合主催者が続行しますと言ってきた場合に舞台監督としてはやりたいと当然そうなってきます。劇場側からと言った場合に権利があるかどうかは分からないんですけども、じゃあその場合にサスが揺れます、当たりましたとその後まだ転換等がまだあります、とした場合に確認はさせてねとは言える。じゃあそうなった場合にどれ位かかるの？ということ踏まえた上で、1時間かかるのであれば無理だねと持っていかのか、取りあえず5分、10分確認するからとそれはそれでいけるところまで行きましょうとなる。まあ、まだうちの場合はそこまでシビアに決まっていなくてただそういう持って行き方をするしかないかなと。

畠中: 皆さんの話をお聞きしていても難しいんだなという考え方がいっぱいあるので、大事な公演があるし難しいんだなというところがある。その中で一ヶ月くらい前に大分のホルトホールの避難訓練コンサートに僕は参加して来ました。ここに参加して初めて思ったことが一つだけあります。ほかは他とよく似た感があったんですけど。演奏中に地震が起きてそれに対して準備段階に入るプロセスに入る、さっきおっしゃっていた考え方のプロセスに入るんですけど、



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

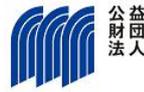
畠中: 大分のホルトホールの場合は演奏中にいきなり緊急地震速報が客席内に流れます。演奏中です。まず最初のアクションがそれでした。今、パネラーの方が難しいって言っていたことがもう一掃されてしまいます。もう自動的にもう何なんだって状況で、誤報であろうがなんであろうがですね。そこでもう鑑賞価値っていうのがゼロになってしまって中断ですよ、いきなり中断です。これについてちょっと伺いたいと思っています。こういう流れ、こういうのをやっていることなんで、多分ホルトホールで熊本の県立劇場もちょっと私聞いてみました。緊急地震速報は流します。これは何でと言うと、聞いてみましたらちゃんとお客さんには身構える時間が必要なんだ。だからこれは必要だという意識がそうなんです。これは担当者の方にあるんだと思います。こういう流れがあると今難しいと考え、きっとどこかでこのまま行くとですね両方を体感するお客さんが日本中で増えていくわけですね。今皆さんのお話ちょっと伺いたいなと思ってます。もし宜しければお言葉ください。

伊藤: 難しいので、僕からいきます。これ言い切っちゃうと怒られるかもしれないですけど、良かったね緊急放送を流すかどうかで、流して逃げられたんで良かったね、何も起こらなかったけどと本来的にはこの方が良いのかもしれない。だけど、諸々考えると揺れた時に避難してくださいを含め、火災が起きた時に避難してくださいも含め劇場側から指示を出しますよと、であれば緊急放送的なことはシャットアウトして、何かありましたら劇場側で担保しますので、それに従ってくださいと言い切れるところまで僕らが頑張れるなら緊急放送的なものは切れるんだと思う。本来それが良いのかどうか含めてあるんですけど、本来ならそこで言い切れるか、緊急放送を含め各自が持っている携帯を放棄してくださいと携帯も入りませんと、ただし我々劇場スタッフの方が逃がせますよと言いたい感じです。

金子: 難しいですね。ただ、今後この放送がより精度が上がるかどうかことに関わる。実際、本当に震度5とか6とかが99%来るって言うのなら、何でも揺れるのだから放送を入れた方が良いのかもしれないと僕、個人的にはですねそう考えます。どっちにしても揺れるんですから先に分かったほうが良いよってことです。ただそれが誤報である現状でいくと、その誤報のために1時間半かけて芝居も盛り上がってきてこれからクライマックスの時にいきなり止まるっていうと、我々の考え方でいくとそれは今はちょっと止めて我々の方で頑張るという考え方になっていくところかなと気がします。今後、もっと変わっていくかもしれませんが。

畠中: そうですね。これちょっと今考えて気に留めておきたいことが。熊本の方がおっしゃっていたことは緊急地震速報というのは震度5以上が想定される時に事前にP波を検知するんですね。それによって大きい地震が来るよと。それで、その地震の影響が震度4以上の影響があると思われるエリアに対して発信するんです。それを受信した所は緊急地震速報が流れます。熊本の場合それがあつたらしいのです、実際に。だけど熊本のホール自身は震度4が来るというエリアの地域なんです。だから緊急地震速報が入りました、だけど実際に劇場が揺れた震度は2だったそうです。つまり公演で体感しているお客さんは2なんです。2で緊急地震速報が流れてしまって公演がもう中断してしまったという状況をもう熊本は分かっているんですけど、そういう判断なんです。これは聞いたときビックリしました。本当にそれで劇場が、伊藤さんがおっしゃったようにそれで割り切れるものなのかなというふうに思うんですけど。はい、というところですね。これについては今後どうなっていくのかなというのをちょっと、今心配しているんですけど。これは難しいということで終わるんでしょうか？これはどっちが良いってことじゃないのでしょうか？

客席①: 今までの話を聞いていると施設の安全管理ということではなくて、公演を維持していくためにはどうしたら良いのか？地震が起きてもやるっていうのは正しいの？そういう話になりかねないんですけど。基本的に我々が今やることは、施設の安全管理を維持していくためにその意識を



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

客席①: 向上させる為にやっていると思うのだけど、その辺がなんかズレていませんか？

畠中: えっと、どういうふうを考えていけば良いでしょうか？

客席①: 基本的に地震がきたらどうするかって話だよ。地震が起きたときにどうしたらよいか？避難をするにはどうしたらよいか？我々、施設の管理者としては安全にお客様を外に避難させるのが務めなんです。ただまだ外に出したら安全ではないという状況の場合にはまだ居て下さい。大きな地震の時には帰れなくなるんですよ。だからそうすると、このホールは帰宅困難者の場になるかもしれないという場合もあるかもしれない。そういうところでの、いろいろなパターンがある中での避難訓練コンサートで、コンサートをしているとか演劇をやっているときに今出た課題をどう取りますか？中止しますか？ということ判断した上で待受させた上でちょっとお待ち下さい確認致します。そうしたら燃え始めました。基本的にホールで燃え始めて避難しないといけないような火事はきっと起こさせませんが。

伊藤: 少しズレると、緊急放送をどうしようかという話なんで火事が起こったら僕らはお客を逃がす方向性はあっていると。緊急放送に関してどうかというところだけはコメントを頂きたい。

客席①: 緊急避難放送というのは、もしかしたら大事になるのかもしれない。今、金子さん言ったように精度がもう少し上がったのならば、きっと震度5以上で安全にお客様を守る為に避難していくホールは増えていくと思う。そのところだと思うんです。公演を大事にするのかお客様を大事にするのか、お客様の安全を確保するのが施設の担当だとしたら逃げる方向が上からはアウトなんですよ。ただ緊急避難放送を切るとしたら今はお客様が逆にスマホとかで緊急避難放送を聞いたりして逆に慌てる人達がいるんですよ。そのところもどうするのかというのも考えないといけないところです。

畠中: ありがとうございます。

客席②: 福岡の会館です。4月16日に宝塚歌劇団の公演がありました。その時の事例だけ報告しておきますが宝塚はルールが出来ていて、どうせ客席で機器の音になるんだよ、お前達も持っておけ、普段持たなくてももっておけと、誰でも良いと。それで感知したら照明だったらボーダーライトをつける、もう他のものも止めてしまえ、そのへんはもうお前達に任せるから。それで後のことはこっちで対応するから、お前達でその判断はして良いと、躊躇するなと、と言いつつそれで一方は劇場側は主催者側には揺れたら取りあえずは身は伏せないといけない。その後お客さんがどう思うかは阪神淡路のことがあるからそうかなと思ったんですけど、ドア開けると、逃げ道さえ分かっていたらお客さん少しは落ち着くよ。それで、そこから色々点検してやる、やらないというような判断を宝塚はやりますよと。やって実際本当に一回止めました。それがまた精度が悪いのか、auとsoftbankと、docomoでauだけ感度が低くてauを選んでほとんど揺れないのに止まっちゃいましたけども、それはそれでエクスキューズして再開しますということでそれで良かったというふうなことだから、それはそれで全て俺らでできないよと思いましたけど。これはこれで一つの事例として挙げておきます。

畠中: はい。とても良い事例、経験なんだなと思います。そういうふうに主催者側が、そういう対応が既にあるれば素早く劇場は劇場で対応がスムーズにいくと思いますね。

堀内: 先日、私どものホールでも宝塚さんの公演がありまして、もう教科書にしたいくらいの対応マニュアルをお持ちです。私どもの劇場KAATは横浜の都心にあつて海沿いで外に避難するのが難しい場所であったり、館が複雑な導線であったり私どものルールも加味してKAATで公演する時のルールを宝塚さんで作ってそれをもって打合せをすることとしました。その時、私もさすがだなと思いました。さっきの緊急地震速報の話は非常に難しい話だと思うんですけど、ただ緊急地震速報が鳴ったからといって鳴ってる間からお客様が客席から逃げられるわけではないじゃないですか。

堀内: 実は揺れ始める前に上演を止めた方が舞台上に居る俳優は逃げ易いか、明るい中で地震を迎えるというのであればちよつと良いのかもしれないけれど、ただ大きい地震が来たらかなりあつという間に上演が止まるんですね。実は問題なのは客席に観客が居て、舞台上に俳優が居て、多少のことで物が落ちてきたり倒れたりしないような、ある程度の地震までは安全装置の範囲内に入っているような措置を僕らでやっておくというのが結局のところ大事で、それがなかったら緊急地震速報は入れるとか入れないとかというような話ではない気がするので、最初に伊藤さんが言ったようにそこを劇場が担保する上で劇場がコントロールするんだと、伊藤さんが一番最初におっしゃったことと同じことを違うかたちで言っているんですが、一番大事なのはそこのかなと。地震のアナウンスにどう対応するとか、誰が地震のアナウンスをするとかの以前に震度7が来たら建物自体が、まずい場所が出てくるかもしれないですけど、震度5強から震度6弱位までの地震では舞台上に立っている物は倒れませんと言うくらいの措置をわれわれがスタンドやスタックしているスピーカーやあるいは吊り物やらに二重のセーフティーをとって設置をすることが僕らにできることじゃないかと私は思います。

島中: はい。

金子: あとひとつ。今、日本これだけしょつちゅう揺れているのでお客さんの意識も随分変わってきていると思います。なんでほんとに10年前だったら誤報っていったら凄い問題になっていたけど、今はそこまでならないのかなと、勿論公演は潰れてしまうかもしれないのでそれ自体は残念ですけど、ただ意識が全然変わってきているからひよつとしたら我々も意識が変わってきているのに気づいていかないといけないのかなとも思います。

島中: はい。あの良いというか、解ったような気がします。それと、**客席①さん**よりの言葉にあるように劇場は安全って考えるようにしておくべきだというようなこともあるのですが、先ほど宝塚の福岡の方**客席②さん**からのように主催者側が体制を取られているのであれば**客席①さん**が言うように劇場側は安全に集中的に考えられるんじゃないかなと、準備としてね、そういうふうにつえられるんじゃないかなと思います。だから劇場側はそれを踏まえて安全に対する用意、準備というのが必要なんですが、何なんだな？っていうのも思いました。すみません。時間がきてしまいました。もう終わらねばと思っているのですが、ここでもうちょっと何かあればお言葉を頂けるようでしたら。なかなか皆さんにご質問の機会が少なくて申し訳なかったのですが、何かございますか？挙手をお願いします。何か一言、聞きたいなとか言いたいなとかということはないでしょうか？ご質問、ご意見などありませんか？パネラーの方々に最後一言お願いできますか？

客席③: 宮崎の花田といいます。避難訓練コンサートのお話が途中どこかへ行ってしまったみたいで、さっき島中が聞いた時に皆さんやっぱりやりたい、もしくは実施していると〇が沢山あったと思うんですね。少しお話の中でありましたけど、いわきのアリオスさんのところ一般的によく行われている避難訓練コンサートとはちよつと違ったというかかなり独自のやり方をしていると聞いています。先ほど多少の説明をして頂いたのですが、もう少し避難訓練と避難訓練コンサートのお話についてですねブラインドの部分とかプロジェクトチームの事であるとかというのを少し体系的に聞かせて頂ければと。

島中: お願いします。

佐藤: はい。まず、大きく違うことはないのですが、ステージ上は映画をやったんですよ。今はちょうど議論が盛り上がったんですけど、その公演中断というか訓練のやり方ですよ。映画ほどお手軽なものはないです。生身の人間を使うといろいろと面倒くさいので映画をお薦め致します。さっきの話で言うと訓練は訓練であってオマケというか上映会は上映会だから訓練が終わる

佐藤: まではお客様に協力してもらおうのですが、アリオスの場合は予告編を流したんですよ。劇場で前に流れる予告編を流してその時にドーンとやったんですけど、大きく違うのはお客さんに始まる前に全部タネ明かしをしてしまうんです。これから避難訓練という名前で避難誘導訓練とチラシ作っちゃいましたからお客さんは動くこと知っていますから。知ってる以上はお客さんに何が起きるか全部説明しないとイケない。説明するに当たってたまたまその時は私がMC役でプロジェクト側のメンバーだったので館長の挨拶の前に私が出て行って、これからこうゆうふうな流れで避難誘導訓練を行います。これから館長が出て挨拶をするけど、館長は皆さん何も知らないから。館長が知ったような口で挨拶するけど、皆さんニヤニヤしながら聞いて下さいね、こういう流れでやりますからねと、スタートでやったんです。今日皆さんの話を聞いてお客さんに事前にタネ明かしをしておいたのが珍しかったのかなと僕は思います。お客さんがどう思うかというのは、お客さんをお願いしたのは一つだけでスタッフの言う通りに動いて下さい。それはお客さんが判断、お客さんもこちら側の人間と思っていますからスタッフが間違っているのが何しようが身体的に無理なことは言って頂いて良いですから、とにかくスタッフの指示に従って下さいというようなやり方をしました。プラスでアリオスの場合はその映画上映の避難誘導訓練、ちょっと長年の蓄積の集大成みたいなものもあって、地元の消防署の、いわき市の平地区の平消防署にお願いして出動要請、訓練協力、訓練協力要請をして出動してくださいと119番しますので出動してくださいと、ただ消防署にも何で119番したのかは教えませんでした。それはスタッフが電話で119番で言いますからその通り消防は消防で動いて下さい。消防は消防がいつもやっているように電話をくれた人に色々聞いて、最終的に消防隊が火災でやりましたので消防隊が入って、施設の役割としては消防隊に引き継いだ時点で我々の役割は全部終わりですから、いわゆる総員退館となりますよね。それで、そこまでを検証するというようなことをやりました。ここは宮崎なので福島の恥を言っても良いかなと思うんですけど、消防は消防でミスだらけでアリオスはアリオスでミスだらけで、ミスとは言わないんですけど、とにかく反省すべき点がお互いにあった。あの毎日訓練している消防隊でさえ消防団じゃないですよ消防隊ですよ。本職の人間があんなミスをするんだってのを市民の前で晒してくれたんですよ。

中村: 話をするに当たって消防の話を。うちは年に2回やるので、その内1回は消防が見に来て我々の訓練の評価をする。それをフィードバックをして次へ向かって行くということをやっている。毎年2月の休館日でやっているんですけど、それでいつも2月の消防訓練に来てもらっているんですけど。豊橋さんの避難訓練コンサートを見に連れていかれて、色々豊橋さんでも話させてもらったんですけど、それを元にやった方が良いのかということになるんですけどもやってみました。それでやるに当たっての目的が内側の人間が判断すること。まずは逃がさないといけないので、地震で豊橋さんはやっていたんですけど照明をあおったりとか音が凄かったりとかそれも如何なものかと。どうせ間違いなく逃がすのであるならば火事が良いだろうと、それだけで話が進んだんですけども、でお客様には知ってもらった方が良くってというのは何故かといったら、知らない人間がやるっていうのはやっぱり知ってる側からすれば頑張ってるなど見ってもらえるじゃないですか。なので、一生懸命やっている姿って初めてだったのでうちも。一般のちゃんとしたカンパニー役じゃなくてうちのスタッフが一般のホールを借りて上演会しましたよという形なので、表方も要は一般の人達ですよという感じだったのです。なので逃がす方の意識も一生懸命。消防も一生懸命。消防もうちらの顔を見る人達は解っているんですけど実際に助け出す側は何階に何人居たりとか、何処が燃えたりってことを一切言わなかった。なのでそこでちゃんとうちの人間と消防隊と消防本体がやって来たその時の



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

中村: 引き継ぎが上手くいかなかったので全てがグチャグチャになったという悪循環ですね。なので露出させる。消防側としても今回こういことをやっているというアピールができるみんなが居るなどで消防も乗ってきた。ただ高所作業車を使って人を逃がしたいとか消防の意見もあったりするのでそれは仕様が無いなのでうちの職員が4階のどうでも良いような所でポツンと座って映画を観ているんですよ。それでわざわざ寒い中ダウン着せて寒い中座らせてですよということもやったというだけのことです。

佐藤: 消防側と利害が一致して実施できたのですけど。消防としては割と派手目の動きを見せたかったんですね。話は戻って避難訓練、避難訓練コンサートも含めて避難訓練某というところをやるに当たってアリオスがこれをやって良かったと思うのは、私は広報のセクションなので感じたことって、災害で大きな災害があった後でというのは、やはりこのような密閉された空間に人が入るってことはちょっとすぐには戻ってこないわけなんですね。訓練はもちろん法令で決まっているから粛々とやるのですが、訓練はある意味、地方の方がマスコミには取り上げられやすいんでマスコミに取り上げてもらってアリオスはこのホールでこういう取り組みをしてお客さんに対して安全だというアピールですね。ホールがお客さんのことを考えているのをアピールしていないとこれは伝わらないので、一般の参加して下さったお客様はもちろん、ニュースで取り上げられる新聞に載るところがこのようにショーアップされた避難訓練の一番のメリットかなと思います。訓練する方はもちろん訓練されるから良いんですけど副次的なものの一番のメリットはそのアピールと安心感の調整というところですよ。

畠中: はい、そういうことも思います。

中村: もう一つ言うと、人を集めるのは意外と大変です。どなたをメインに集めたかという感じなんですか？新国立劇場の場合は？やっぱりネームバリューがある人が居るから集まるんですかね？

伊藤: 地元の方々に協力して頂いて、とにかく集めるのが目的なので、例えば集まりにくければどこかの学校にお願いしてとか、色々あったのですけど。

中村: 全然集まらなかったところもあって、やっぱりなかなか集まらなかったのが一生懸命頑張って告知したのですけど、そこはやっぱり目標の1000人位はいきたいね、500はいきたいねとあったのですけど全然及ばなかったんですね。その大変さもあるのでやっぱり地方に行けば行くほどそれは難しいっていうのは凄く感じています。

畠中: ありがとうございます。僕も今同感したのが佐藤さん最後におっしゃっていましたよね、あのこの副次的な考え方、安全だということの認知、そういうところも来て頂いた人には重要なメッセージになると思います。僕もそういうことの繰り返し地域にとってその県立でも市立にしてもですね、そのステータスと言いますかあることの価値観の向上にも繋がるというふうに僕は思っています。ですからできれば大変だと考えずらやるのも大変なんですけども、是非、皆さんの方でもチャレンジして頂ければと思います。時間になってしまったのでこれで終わりたいと思います。最後に一言ずつ皆さんにお願いしたいと思います。

伊藤: お疲れ様でした。各施設は違ってもこれはできるかなと思いますので是非これは検討して頂きたいと思います。非常放送これ本当に聞こえますか？どんな音量で聞こえますか？自分の家に帰るとできるかもしれません。それと後、停電。これくらいの地震の大きさと真っ暗になります。すぐその後、非常電源で明るくなるはずですよ。それはどれくらいの明るさなんだろうかと確認しておくとなんかずっとペンライトをもっていないとダメなのか？もしくはその後自家発電を持っているところはもっと明るくなるならそれまで待っていられるのか？それは年に一回、電気設備点検で電気をおとすことがあると思います。その時に確認できると思うのでされたら如何でしょうか。以上です。



公益
財団
法人

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

畠中: ありがとうございます。

堀内: 一言にならないので一つだけ。運用のルールを決めるために色々な材料がありますけど、出していた方が良い話で特定天井問題というのがあって、震災以降に天井の仕上材が構造計算がなされているものでないと認められないと建築基準法が変わりまして、それ以前にできた建物はそうでなかった場合にはいわゆる既存不適格という状態で改修等無い限りはそのまま使い続けられるのですが、とある立場に立っているとですねそこに留まり万が一天井が落ちてきたら誰の責任になるんだというようなことをとある立場からおっしゃる方も必ずいらっしゃると思います。我々の館にもそういう立場で発言をせざるえない人も居るかと思います。それも含めてもちろん、大きな館であればとは言うものの調査がおそらく入っていることだと思います。そういうことであったり、これまでの状況、地震での状況はどうだったのか？非常に現実的な判断や、それ以外の今ここで話をしてきた様々な危険など総合的に勘案してその地震が起こった時に少なくともそれから暫くのあいだ観客をどのように留ませるのかあるいは誘導すべきなのということはそれぞれ考えていくべきだと思う。天井の問題も要素の一つにあると思いますのでちょっと最後の付け足しになりますけど申し上げて頂きます。今日はありがとうございました。

畠中: ありがとうございます。

金子: 劇場に来てくださったお客さん、そして舞台に立ってくださるアーティストの方々を守らなければいけない、火災、あるいは地震、これから考えていかなければいけないテロという問題にも対応しなければならぬと思うのですけども、そこで安全を担保することができるのはおそらく劇場スタッフ、舞台スタッフがやっつけていかなければいけないと思うので、これからも我々と共に私も皆さんも含めて色々考えて勉強していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

畠中: はい、ありがとうございます。

中村: 今日はお疲れ様でした。最後に一つだけ質問させて下さい。AED講習会ってホールでやっているのでしょうか？○か×かお願いします。やっている方がいらっしゃいますね、ありがとうございます。訓練の時に練習室系にレサシアン(※マネキン)を置いておくんです。消防から練習用のAEDキットを借りて置いておくんです。普通に置いてある。「誰か居ませんか？」と、扉を開けた瞬間にレサシアンが寝ているんですね、それを見れた瞬間とても楽しいですよ。皆さん是非やってみてください。ありがとうございました。

佐藤: ありがとうございます。私もこんな前に座って偉そうなことしゃべりましたけど、自分が体験した大きな地震というところがなかったらここまで考えているのかどうかってのも実は正直ありまして、今日は九州の皆さんなので大きい地震を受けた直後なのでもう釈迦に説法かなと今日は参ったのですが、被災を受けて思ったのはこういう災害ってのはすぐ来るんですよね。他の地区の人にはよく言うのですが、東海とか南海とか話はありますけど、あのすぐ来るので準備しておいた方が良いでしょう。以上です。ありがとうございました。

畠中: ありがとうございます。もう一度パネラーの方に拍手で労りたいと思います。時間の方がちょっと予定をオーバーしてしまいました。すみません。私の進行の方も色々至らなくて申し訳ありませんでした。この後、コンサートホールを見学、ちょっと見てみたいという方はこのまま舞台上に上がって頂いて、ある程度まとまったら僕の方で先導して行きますので舞台の方に上がってきて下さい。宜しくお願いします。ほんとうに遠いところありがとうございました。お気を付けてお帰り下さい。ありがとうございました。